

平成 25 年度 第 4 回狩猟鳥獣のモニタリングのあり方検討会(鳥類・獣類合同)  
議事概要

日時：平成 26 年 2 月 28 日(金) 13:00-16:00

場所：(一財)自然環境研究センター 7 階会議室

議事(1). これまでの調査検討状況について

鳥類

➤ ウズラ、ヤマシギについて

- ・ 参考資料 2 - 1、7 ページで、北海道音更町でのウズラ調査(6 月下旬)ではプレイバック法で 3 羽確認となっているが、今回のウズラ調査マニュアルでは最適な調査時期を 6 月上旬としている。音声に反応したのでなければ結果の書き方に注意が必要。(川路)
- ・ ウズラ調査マニュアル、2 ページのウズラの写真はもっと鮮明な写真に差し替えることができないだろうか。(尾崎)  
野生個体の鮮明な写真の入手は困難。現場で野生個体を撮影した写真は、これらに限られる。(事務局：中島)
- ・ 参考資料 3、4 ページの「愛知県稲敷市」は誤りだと思うので、修正が必要。(尾崎)
- ・ ウズラ調査マニュアルは北海道での調査を基準にしているが、北海道と本州では調査適期がかなり異なると思われる。本州では調査を行っていないので、マニュアルに「北海道では」という但し書きが必要では。(尾崎)
- ・ 調査マニュアル作成にあたり、年一回の調査を元に調査適期を示すのは乱暴なのではないか。調査結果は天候など様々な要因が影響するため、調査方法確立を目標とするなら、再現性の確認が必要。ただ、そういった研究は大学の役割かもしれない。(羽澄)(橘)  
再現性の確認は必要だと思うが、ウズラは調査できる地点数が少ないため、他の場所で十分な調査ができなかった。マニュアルの冒頭に、北海道と九州での試行調査に基づくものである等、使用上の注意を記載している。(環境省：堀内)
- ・ ウズラやヤマシギ(特にヤマシギ)について、確認数の減少は、日本に渡りをする前の土地(国外)に起因する可能性もある。各地に保存されている標本の DNA 調査などで日本に渡ってくる個体の由来を調査した方が良いのでは。(尾崎)

➤ ヤマドリについて

- ・ 出合数調査はマニュアルも作成しながら長期間継続してきた調査で、調査人数も 500 人以上とかなり多い。他の調査と比べると、全国性、広域性、定量性があり、非常に重要な調査だと思うが、どのような問題点があるのか。(三浦)

ヤマドリは 30～40 年間メスの捕獲が禁止されており、野生下ではメスの数が多くなっていると思われる。しかし、出合数調査ではオスの割合が高く、狩猟者の判断に何らかのバイアスがかかっている可能性がある。(川路)

狩猟者がキジやヤマドリを獲りたいため、出合数調査の結果がオスに偏っているのであれば、持続的な狩猟を目的にしていることを狩猟者に理解してもらい、正確なデータを収集することが重要な課題である。(三浦)

高い意識の元、調査に協力してくれる狩猟者を選んだり、モデルを作って調査をすることで、出合数調査については精度の問題が解決できるのでは。(川路)

出合数調査について、出合数を聴取する対象は大型獣を目的とした狩猟者も含まれている場合がある。(事務局：中島)

大型獣を目的とした狩猟者では、ヤマドリのオス、メスの判別は正確にできていない可能性が高い。(川路)

- ・ 現在もヤマドリの放鳥は行われているのか。出合数調査の結果グラフに、どこで何羽放鳥したかを記入してはどうか。(羽澄)

休猟区等に放鳥しているが、一般的に狩猟者は放鳥後の鳥をすぐに撃つことはしない。放鳥は資金がかかるため、以前より縮小傾向。(川路)

- ・ ヤマドリについても、狩猟者を対象として捕獲意識の動向調査をした方が良い。(橘)  
獣類に需要があるなどの理由で、以前と比べて鳥撃ちの文化が衰退しているようである。(環境省：湯浅)

➤ その他

- ・ WIS (野生鳥獣情報システム) の捕獲位置情報は全国的にかなりまとまっているようだが、毎年のがデータが誰でも閲覧できるシステムになっているのか。(川路)

捕獲数等は平成 23 年度分までを環境省のホームページに公開。誰でも閲覧可能。ただし、捕獲位置情報は非公開。都道府県からのデータ収集状況が良くないので、今後はデータの収集からフィードバックまでの時間を短縮できる仕組み作りをしたい。(環境省：湯浅)

## 獣類

### ➤ アンケート調査について

- ・ 実施したアンケートは猟友会支部に送られており、事務局に狩猟者がいれば、その人が回答する場合が多かったのではないか。そうすると、比較的年齢の高い人に偏りが生じるのではないか。今回のアンケートは個人が回答したのか。(尾崎)

個人による回答。例えばノウサギについては、支部でノウサギについて詳しい方に回答をお願いした。(事務局：青木)

- ・ 資料2 - 2、5ページで示している「狩猟者の捕獲意欲」は、意欲そのものを示しているのか、変化量を示しているのかが明確ではない。支部を対象としたアンケート結果と、講習受講者を対象とした結果とではオーダーが違うのはなぜか。(尾崎)

これは、免許取得当時と現在の捕獲意欲の差なので、変化量を示していることになる。オーダーの違いは、支部では過去に捕獲意欲の高かった方が多かったため、差が大きく出た。(事務局：青木)

- ・ アナグマは捕獲意欲の変動幅(減少幅)が小さい。他の獣類に比べて何が魅力なのか。(川路)

アナグマは元々捕獲する人が少なく、需要は低いが大きな需要減少もないということだと考えられる。(事務局：青木)

### ➤ 生息情報の収集方法について

- ・ モニタリングサイト1000の哺乳類調査は自動撮影カメラを使っているが、鳥類が写ったデータは蓄積しているか。ヤマドリは結構写ると思う。撮影頻度の高い場所があれば、その場所での調査も可能であるし、撮影頻度で動向がつかめるのではないか。(川路)

写っている可能性はあるが、調査している生物多様性センターの担当者が本日は同席していないため、詳細は分からない。(環境省：松尾)

- ・ モニタリングサイト1000では、フィルム式カメラでの調査だが、フィルムは撮影枚数の上限がある。また、カメラの種類や設定によって定量性が異なる。カメラを使った調査を検討するのであれば、他のカメラ調査についても比較する必要がある。(尾崎)

今回生物多様性センターの担当者によると、カメラの選び方も検討会を開いて精査し、より良いものに切り替えているところ。狩猟鳥獣についても使えるのかなど検討の余地があると思う。(環境省：松尾)

## 議事(2). 狩猟鳥獣の次回見直しへ向けた今後の対応方針について

全体

- 平成 29 年度の狩猟鳥獣の次回見直しに向けた大まかなスケジュール管理が必要。データ蓄積には時間が必要なので、現行の手法で進めるか、まずは方向性を決めるべき。(橘)  
実際の見直しに関する作業や検討は平成 28 年度(残りあと 2 年)の予定。都道府県から収集する WIS データは 2 年遅れで収集という現状であり、28 年度には 26 年度のデータが最新というタイムラグが生じるなど、うまくモニタリングやデータ収集が進むとは限らないので、今回は、28 年度時点で集まっているデータを元に見直しをするしかないと考えている。(環境省：堀内)
- 狩猟者アンケートによる生息状況調査は、高齢化により今後データ収集が困難と考えられる。狩猟鳥獣の判断は、生物多様性センターの調査と WIS の捕獲位置情報を基本として、被害状況も踏まえて判断するということだが、生物多様性センターの調査は今後さらに内容を充実させ、WIS の捕獲位置情報についても、何の種を捕獲しているのか(イタチやリス)を正しく判別して、使い勝手を考えていくべき。(羽澄)  
次回の見直しまでの時間は限られているため、今ある材料と、今回検討した内容を踏まえ、次回は見直しをやっていきたい。(環境省：松尾)  
狩猟者に頼った調査は数年後には機能しなくなると思われる。その先の情報収集体制や狩猟鳥獣の指定をどのデータから判断するかなど議論していかないと、次の見直し時には情報が全くないということになりかねない。(羽澄)  
今後、狩猟鳥獣の定義が変更されて、判断方法が変わる可能性はあるのか。(事務局：常田)  
狩猟鳥獣は本来、獲る魅力や資源性があるものであって、それに害性なども加えて指定等の妥当性を判断してきた。狩猟鳥獣の定義が変わることがあれば、その考え方が変わるかもしれないが、現時点では分からない。(環境省：松尾)  
時代によって狩猟者の意識する資源性は異なる。環境省が獣肉を食べる時代に移行させていけば、狩猟者の考え方も大きく変わってくると思う。(羽澄)
- 種そのものの生息動向だけでなく、生息環境の変化についても考える必要がある。(橘)  
同感だが、一方でウズラやウサギは草原性の強い種で、大面積伐採など、強いかく乱に適応してきた。(三浦)
- 狩猟文化が絶滅危惧にある中、狩猟鳥獣に関しても過渡的な措置をとることも仕方ないと思う。1つの方向性として、シカハンターなど特定の種に特化させ、狩猟文化を担わせ、精度の高いモニタリングデータを集められるように精鋭化させてはどうか。(三浦)

## 鳥類

- ・ ウズラとヤマシギについては基礎的知見が不足しているが、狩猟鳥獣についても基礎的研究をするための予算措置や、大学や研究者への呼びかけをしないとデータが蓄積されないのではないか。(尾崎)
- ・ 来年度実施できるかとは別に、ウズラとヤマシギについて、分類や移動など、基礎的な生態調査を今後の項目に入れて欲しい。又は学術研究をエンカレッジするような仕組みを考えていただきたい。(尾崎)
  - 学術研究としての課題なのかもしれない。研究を推奨する仕組みはこちらでできるか分からない。(環境省：堀内)
- ・ ウズラ調査マニュアルは、誰を対象としているのか。調査主体は誰か。(橘)
  - 狩猟行政は都道府県の自治事務なので、都道府県に呼び掛けていく。生息が確認できている場所でのモニタリングは継続していきたい。ヤマシギは生息情報が多いので、調査方法が確立すればすぐに調査を呼び掛けられるかもしれない。(環境省：堀内)
- ・ ウズラは狩猟禁止にしているにもかかわらず、今のところ増えている様子はない。減少の原因究明や生息数を回復させる手立てはないのか。(尾崎)
  - これからどうするかを考えなければならないと思う。しかし、ウズラはデータが少なすぎるので、少し判断材料が揃わないと方向性も決められない。(環境省：堀内)
  - そういう意味では、少なくともウズラに関してはモニタリングを実施し、今後の方向性を判断できるようなデータをとるという強い意識が必要。(尾崎)
- ・ ヤマドリについては、WIS の各県の捕獲数と出合数を比較するなど、出合数調査の正確性をさらに精査しつつ、他の調査方法も考えておいた方が良い。ただ、出合数調査と実際に捕獲した場所は違うなど、前提条件が色々異なる。(川路)
  - 出合数調査結果と捕獲数で相関をとって、有意性があるかみてはどうか。(三浦)
  - 有意性で判断して良いか分からない。出合数調査は良いデータだと思うのだが、精度に不安がある。別の調査方法を考える必要があるのか、方向性を決めるためにも、更にデータの精度について調査して欲しい。(川路)
- ・ プレイバック調査はヤマドリではできないのか。(羽澄)
  - キジは反応するが、ヤマドリは反応しない。(川路)

- ・ モニタリングサイト 1000 では、本来バンやタシギの生息地である水田などは中心的に見ていないため、国土交通省の河川水辺の国勢調査や農業関係での水田調査などがあれば、そういった調査でカバーする方法を考え欲しい。(尾崎)  
タシギについては他に水田調査等もあるが、全体的に水田での調査地点数は少ないので、他の調査も必要だと思う。(事務局：安齊)

#### 獣類

- ・ 狩猟獣として、区別はされているもののニホンイタチとチョウセンイタチについて、どちらの種を捕獲しているか、しっかり区別することを徹底した上で実態把握をする必要がある。(石井)  
ニホンイタチとチョウセンイタチの同定ポイントはどこか。(環境省：堀内)  
大きさと尾率。毛色も違う。大きさは、ニホンイタチのオスとチョウセンイタチのメスが同じくらいで、チョウセンイタチのオスは大きい。(川路)(石井)
- ・ シマリスについては、本州や四国で捕獲記録があるようだが、シマリスが定着している可能性もあるので、データの精査だけでもした方がよい。実際は外来種問題になるのだが、誰がやるのかを押しつけ合っているのは、手遅れになるかもしれない。(石井)
- ・ ノウサギ、ユキウサギは今も狩猟獣としての人気が高い。狩猟文化を下支えする動物として位置づけ、地域的な生息状況の違いをモニタリングしていくべきである。(石井)
- ・ ウサギについては、亜種区分が妥当かの研究も必要。(三浦)